

## 〈客員教授プロジェクト成果刊行〉

キャロリン・ソブリチャ著 館かおる・徐阿貴（共編）

徐阿貴・越智方美・ニコルス林奈津子（共訳）

『フィリピンにおける女性の人権尊重とジェンダー平等』

（御茶の水書房 2012年 252頁 ISBN 978-4275009746 3,150円）



館 かおる

本書は、2006年5月から同年7月まで、お茶の水女子大学ジェンダー研究センター（IGS）客員教授として赴任した、キャロライン・ソブリチャフィリピン大学教授（以下氏と略称）による夜間セミナー「フィリピンにおける女性の人権尊重とジェンダー平等」全五回の講義とコメンテーターの報告（第1～5章）に、既発表の二論文（第6・7章）を加え、編集・刊行したものである。なお、講義およびコメンテーターの報告は、後日リライトしたものを訳出している。

氏の専門は、フィリピンの女性及び女性学の歴史的、総括的な研究である。中でも、ジェンダー・アイデオロギーやジェンダー理論、リプロダクティブ・ヘルス・ライツ、ジェンダーと開発、女性の人権などについて、先駆的な仕事を行ってきた。その他にも、国連から委託された政策やプログラムの評価研究、HIV/AIDS予防に関わる国際協力のコンサルタント、ドメスティック・バイオレンスに関わる予防プログラムと人材・施設確立にむけてのプロジェクトリーダー、現場の女性たちとのジェンダー・トレーニングパッケージの共同執筆等、実に多岐にわたる。

こうした氏の研究と実践の特色は「フィリピン国内で生きる女性」に対して、大きな比重が置かれている点にある。フィリピンの階級間格差、貧困の問題は、早くから注目されて来たが、フィリピン女性の国外への移動、就労が顕著になってからは、「国際移動」の観点からの研究が急速に進んだ。しかしながら、この書に登場する女性たちの多くは、フィリピン国内で生活し働く者たちである。氏は、多くのフィリピン女性は、フィリピンを離れ、海外で働き送金することを望んではいない、国内での雇用が増え、フィリピン社会を良くしていくことを望んでいると述べ、国内において、彼女らの人権が保障され、ジェンダー平等がもたらされているかに注意を払い続ける。また、援助の受け手側にいるフェミニストたちとドナー国側にいるフェミニストたちが連携し、アジアの女性たちのニーズに応える形で結実することを希求している。

本セミナーは、このような見解をもつ彼女自身が課題とするテーマに対し、日本の研究者や専門的実務家、アクティヴィスト、大学院生等が応答してほしいという、氏の希望により、コメンテーターを二名づつ依頼するかたちで行われ、本書はそれに準じた構成を取った。（コメンテーターの肩書きは刊行当時）

### 第一章 フィリピンの女性運動とフェミニズム研究—その収斂と争点の分析

コメント 原ひろ子（城西国際大学大学院客員教授）、

李麗華・中村雪子（お茶の水女子大学大学院生）

第二章 ジェンダー主流化は女性に何をもたらしたか

コメント 橋本ヒロ子（十文字学園女子大学教授）、  
太田麻希子（日本学術振興会特別研究員）

第三章 フィリピンとアジア諸国におけるジェンダー視点に立った技術・職業訓練  
—JICAフィリピンの役割

コメント 滝村卓司（JICA職員）、臺丸谷美幸（お茶の水女子大学大学院生）

第四章 フィリピン、近隣のアジア諸国におけるHIV／エイズ問題—フェミニスト視点からの検討

コメント 兵藤智佳（早稲田大学平山郁夫記念ボランティアセンター助教）、  
阪上晶子（開発コンサルタント）

第五章 権利アプローチによるジェンダー課題への取り組み

コメント 村松安子（東京女子大学名誉教授）、本山央子（アジア女性資料センター）

第六章 フィリピンのフェミニズム言説にみる女性問題とジェンダー不平等の表明

第七章 ジェンダー、貧困、フィリピン経済—変化の潮流と展望

なお、本学ジェンダー研究センター客員教授、研究協力員を歴任し、本センターの展開に多大なる尽力をくださった、村松安子東京女子大学名誉教授が2013年2月にご逝去された。先生はつねに学問的に真摯であられ、本書の刊行を応援してくださった。昨年3月にスキー場にいる村松先生と電話で校正のやりとりをしつつ議論した、啓発的で楽しかった思い出が蘇ってくる。ささやかであるが、お茶の水女子大学ジェンダー研究センターからの哀悼の意を本ジャーナルの末尾に記させて頂いた。

（たち・かおる／お茶の水女子大学ジェンダー研究センター教授）